2021年度
第4回定例勉強会報告

～組織行動のマネジメント～

2021/10/ 9 (土) 18:00

定例勉強会概要

- 2021年度~2022年度定例会は、
  『組織行動のマネジメント』（スティーブ P・ロビンス 著）
  を読み解き、課題に対して議論/対話を深めていきます。

- オンラインでの勉強会も定着してきました。
  緊急事態宣言解除後ではありましたが、
  今回もオンラインでの開催となりました。

内 容

- 第4回は、”第Ⅱ部 第6章（p.140-167）　個人の意志決定を読み解いていきました。

意志決定はどのように行われるか？

最適の意志決定をさせるのは「合理性」

特定の制限の中で、一貫性があり、最大限の価値をもたらす選択をする

意志決定プロセスのモデル

(1) 問題を認識する
(2) 意志決定の判断基準を特定する
(3) 判断基準を秤にかける
(4) 代替案を考える
(5) それぞれの案を判断基準に照らして評点をつける
(6) 最適な意志決定を見積もる

（重要）意思決定者の脅威、価値観、好み

↓

意思決定の
特定されない要素は無関係なもの

全体課題の報告と討議

Q. リハ部門で起きている様々な状況で、よい意志決定をするためには？

【各グループ意見】

● **A班**

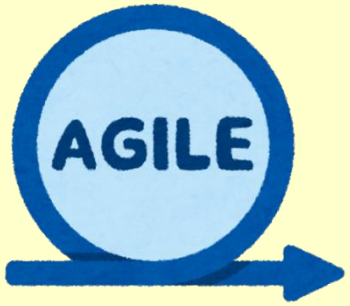
- 個人の意思決定だけでは進められない
- 直感を忘れてはいけない
- 個人の考えと他人の考えは別にあることを理解する
- 全体的に決定(ウォーターフォール型開発)、
  段階的に決定(アジャイル型開発)
- (意志決定の)
  先延ばしは「生産性の敵」であるが、「創造性の源」である
- たくさんの経験をする、自分が決定する
- 情報が少ない中で当事者意識を持って決断する
- 時には“決定しない”という決定をする

一口メモ

ウォーターフォールとアジャイル

作業工程をトップダウンで分割。**工程を一度で終わらせる計画を立て**、進捗管理をする。原則として前工程が完了しないと次工程に進まない事で、前工程の成果物の品質を確保し、前工程への後戻りを最小限にする。

ウォーターフォール・モデルの利点は、**工程の進捗管理がしやすいこと**



現在よく使われているソフトウェアやシステムの開発手法の1つ。

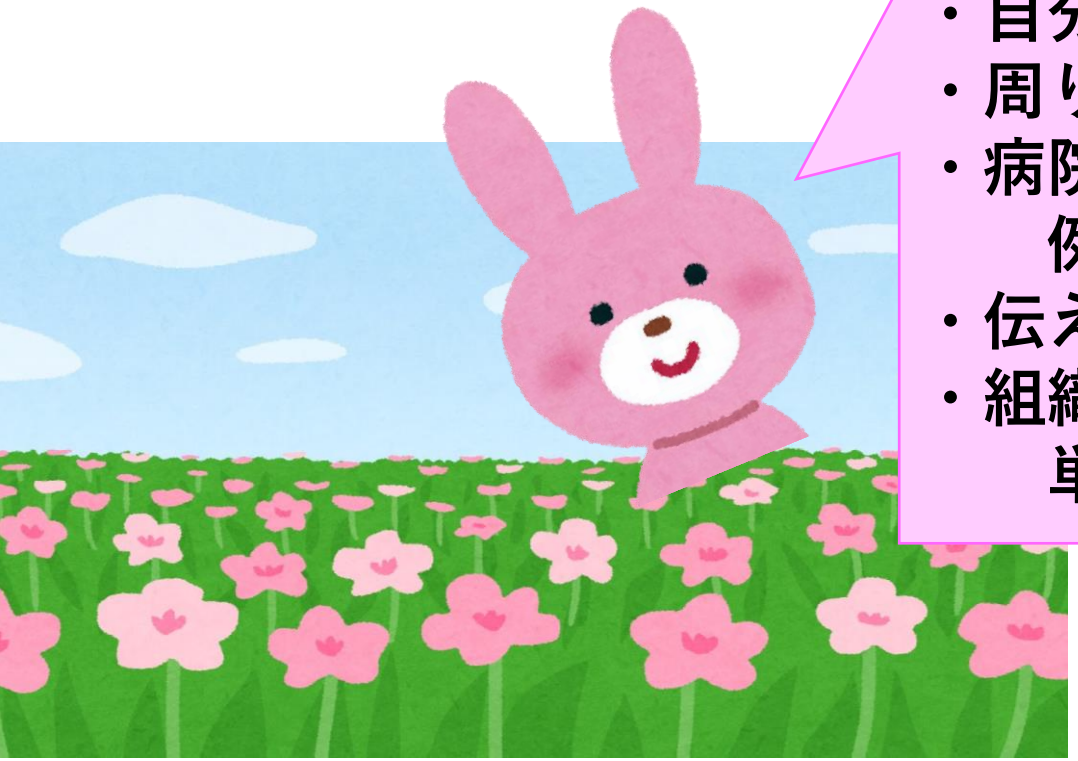
アジャイル開発では**機能単位の小さなサイクル**で、計画から設計・開発・テストまでの工程を繰り返すことにより開発をすすめる。

速やかにソフトウェアやシステムをリリースするのに適した開発手法

● B班

・土台はコミュニケーション
・『問題点の認識』の時点でズレないように吟味
・小さく始めて、その都度修正する
・年度計画だけでなく数年（５年･１０年）を示す
・リハ科の運営方針を明確にし、その方針の中で現場（病棟）に任せる
・病棟リーダー会議を定期的に行い進捗程度を共有する
・「なし は なし」で限界を作らない
・病院の管理･運営部門とのパイプを作り、それがあることを科員に
　わかるようにする
　→可能性を感じてもらう

● C班



・目標、目的を明確にする
・自分の思考を客観的に見る
・周りの意見に耳を傾ける
・病院の目標を個人目標に落とし込めるか
　例）地域の医療を支える、患者層、災害対策
・伝え方が大事、共通認識、どう理解させるか？
・組織視点？個人視点？
　単位･収益、患者…

3つの班に共通していえる”よい意志決定をするため”には、

- **物事を「どの範囲」まで見ているのか**
- **俯瞰的か / 目の前にあることだけか**

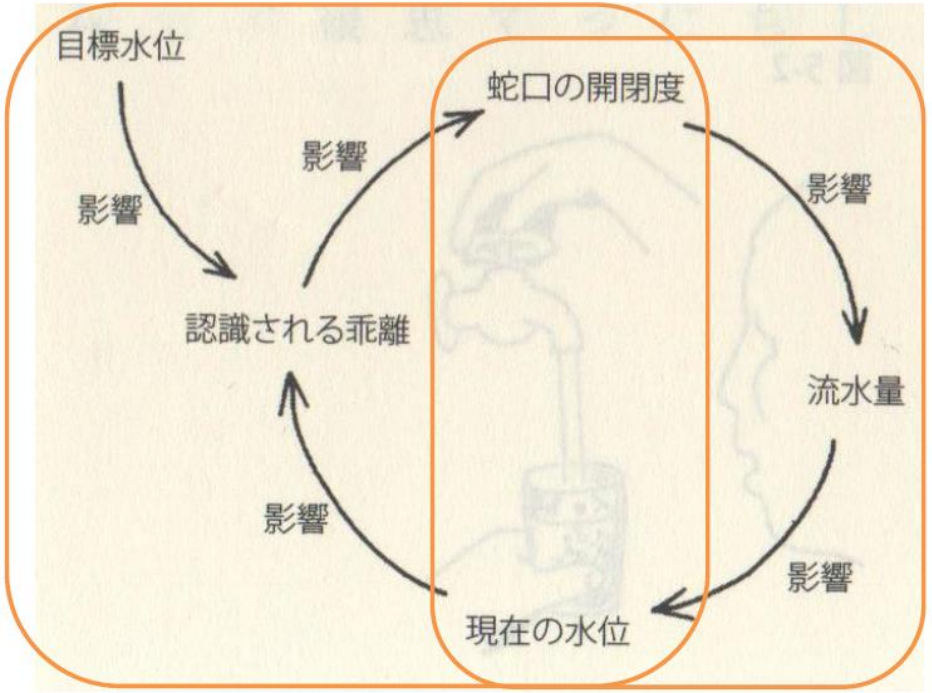
→ 解決策の一つとして、学習する組織“**システム思考**”を理解すること

システム思考とは、

・パターン全体を明らかにし、それを効果的に変える方法を見つけるための概念的枠組み

・ビジネスや人間による企てもまたシステム

・それらも相互に関連する行動が織りなす目に見えない構造で繋がっている



私は水位の上昇を引き起こしている

コップの水位が私の手を調整している

人間の主動作はフィードバック・プロセスから独立した存在ではない

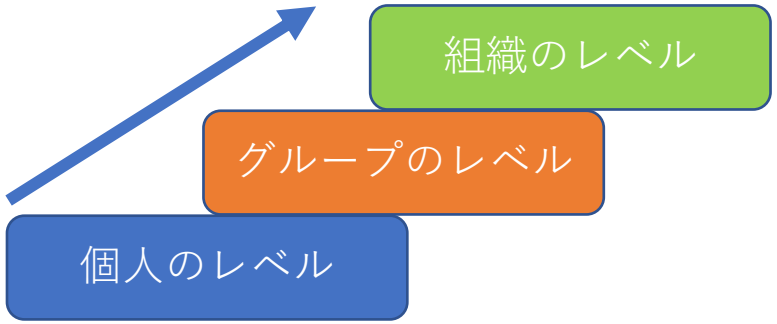
「責任ある個人」の前提を捨てる

システムによって生み出される問題に対しては全員が責任を共有する

2015年度第2回定例勉強会報告（2020年8月8日）より抜粋

感 想

- 勉強会まとめの中で、個人が意志決定をする上で、
”情報はたくさん集める”, “過去になかったかを探る”, “人の意見は聞く”,
“わざと反対意見を当ててみる” 等を考えると八木先生よりありました。
加えて、「学問的正しさ(evidence) を忘れずに」との一言に、
日頃我々が臨床で行っていること同様に、組織運営に関しても学問的正しさが
抜け落ちないよう精進したいと思います。
- 最後に、”個人の行動” については、今回までとなります。次回から ”集団の行動“
について、理解を深めていくことになります。



次回は、第III部 7章 “集団行動の基礎”